

式 辞

本校の名物である大櫨に、今年もまた勢いよく若葉が萌え出す好季節となりました。生徒諸君にあっては、「質実剛健」「文武両道」の具体的な実践に余念のないことと格段の期待を寄せています。

さて、過日、4月20日は、本校の117回目の創立記念日でありました。創立記念式典にあたって、2点、話しをします。

まず、1点目は本校の歴史です。明治33年、西暦1900年に、本校は「栃木県第三中学校」として開校しました。

本校の開校前、現在の高等学校にあたる尋常中学校は、今の宇都宮市と栃木市にしかなかったため、芳賀地区における義務教育終了後の進学は、非常な困難を伴うものであったようです。選択肢としては宇都宮ということになりますが、交通も未発達で通学もままならない時代に、強い覚悟と目的意識は勿論のこと、さらに経済的な支えがなければ、学びたくとも学べない状況であったことが推測できます。記録によれば、明治31年、宇都宮の尋常中学校に芳賀郡出身の生徒は86名しか在籍していませんでした。

そのため、芳賀地区にも尋常中学校設立の機運が高まり、設置要求運動につながっていきます。その結果、明治31年に芳賀地区に中学校を、分校でなく本校として設置することが決定しました。学校用地は、当時の真岡町が住民22名から買収し、それを栃木県に寄付しました。建築に要した経費約1万円、現在の価値で2億円程度のうち、半分に相当する5千円、1億円程度が地域の人々から栃木県に寄付されています。

本校が地域の人たちの教育に対する熱い要望により設置されたこと、設置に当たって地域の人たちの具体的な努力があったことを、我々は忘れてはなりません。

校名については、4度の変遷があります。創立時は「栃木県第三中学校」でしたが、翌年に「栃木県立真岡中学校」となり、昭和23年、新しい学校制度のもと、「栃木県真岡高等学校」となり、昭和26年4月1日から「栃木県立真岡高等学校」となって現在に至っています。

今の校舎については、昭和41年から4年9か月をかけて新築されたものです。その際、旧校舎の本館は「記念館」として現在の場所に移されました。平成10年には国指定の「有形文化財」として登録されましたが、建設から110年以上経過しており、昨年度、耐震改修工事を行いました。この工事については、テレビのCMでもよく目にする「大塚商会」の創業者であり、現在は相談役名誉会長である大塚実先輩に特段の御支援をいただいたことは諸君も承知のとおりです。

また知ってのとおり、今年度は6月に起工し、約5ヶ月をかけて校庭の大改修工事を行います。サッカー場全面と野球場の外野部分が人工芝となり、陸上のトラックは

ウレタン舗装で整備されます。完成すれば、全国にもほとんど類を見ない素晴らしい環境となるわけです。この工事についても、大塚実先輩の全額寄付に依るものであります。

本校創立以来、巣立った先輩は全日制・定時制を併せて24,191名に及びます。本校の先輩には、地元芳賀郡や本県はもとより、各地各職域でリーダーとして活躍している方が大勢いますが、中で現在の「巴コーポレーション」の創業者である野澤一郎先輩は、「野澤一郎育英会」によって、本校のみならず県内全高校を範囲として、学業、スポーツ、文化芸術活動で活躍が顕著な生徒を顕彰するなど、本県教育の発展に大きく寄与されていることは諸君も知っての通りです。野澤先輩は本校在学当時、上三川から歩いて登校されていた、という話しも聞いています。

野澤一郎先輩、大塚実先輩から我々が学ぶものはたくさんありますが、特に苦勞が人を育てる、苦勞なくして人は育たない、ということをお金を機会に改めて肝に銘じて欲しいと思います。

本校の歴史や先輩の生き方を踏まえて、本校の重い伝統への誇りや地域の人たちへの感謝の念に改めて思いを致すとともに、生徒諸君が自らの夢や希望を膨らませて志とすること、また、本校の伝統に新しい息吹を吹き込まんとする諸君の気概に大きな期待を寄せるものであります。

2点目は、校歌についてです。校歌はその学校を象徴し、また在校生にとっては勿論、卒業後も精神の拠り所となるものです。同窓会を初めとして本校の卒業生によって組織されるOB会などでは必ず歌われて、若いも若きも本校での青春に思いを馳せることとなります。

この校歌は昭和9年に制定されて以来、変わらずに歌い継がれてきたものです。全国のほとんどの高校が、先の戦争の後、校歌を変更してしまった中であって、制定以来80年歌い継がれてきた校歌はまさに稀な伝統の証でもあります。

先ほどは「伝統に新しい息吹」という言い方をしましたが、校歌には「古き歴史に新しき光添えなん」とあります。「古き歴史」とは、単に本校の伝統を指すものではなく、広く社会の有様を含んで、諸君に将来の社会人としての活躍を期待するものであると、私は解釈します。また、「添えなん」の「なん」は強い意志を表す言葉であって、本校生の面目を躍如とする言葉と言えます。

先人が築いてきた社会を引き継ぐに止まらず、新しい光を当ててさらに前に進めることのできる力、その力の源となる知識や精神力、行動力を本校で身に付けてほしいと願ってやみません。

2点話しました。単なる聞き手に止まることなく、聞いたことを基として考える主体となり今後の行動に反映させること、それにより諸君一人一人の突破力の高まりを

期待して、創立記念の式辞を閉じます。

平成二十八年四月二十二日

栃木県立真岡高等学校長 菊地 透